

(単位:100万カナダドル)

対日輸出	対前年比(%)	カナダ産輸出	対日輸入	対前年比(%)	カナダ産輸入	対日輸入合計
1958	105	4,326	70	(13.8)	5,050	175
1959	140	5,140	103	(46.5)	5,509	243
1960	180	5,287	110	(7.5)	5,483	290
1961	232	5,895	117	(5.6)	5,769	349
1962	216	6,348	125	(7.5)	6,258	341
1963	238	6,980	130	(4.1)	6,558	428
1964	332	8,304	174	(33.7)	7,488	507
1965	317	8,767	230	(32.0)	8,633	547
1966	395	10,326	253	(10.0)	9,866	648
1967	574	11,411	305	(20.4)	11,075	879
1968	608	13,624	360	(18.2)	12,358	968

(出所)「カナダ事情」昭和47年、161-2ページ

前ページの「歴代総理訪加、米日首脳会談一覽」からもうかがえよう。

この間における日本の重大な外交目標は、国際社会に尊敬されるメンバーとして再登場することであったが、カナダはその日本の希望を実現するため、いろいろなかたちで側面からの援助を惜しまなかった。たとえば、一九五四年十月にオタワで開催された「コロボ計画委員会」では、カナダの動議で日本の加盟が決定し、五六年十二月十八日には、日本はカナダ、アメリカの支持推薦を得て国際連合に加盟することになった。さらに一九五五年のGATT加入、六三年のOECD加入等に関しても、カナダは常に積極的に日本を支持した。

このように日本の国際的地位がだいに向上し、国力が充実していくにしたがい、日本とカナダはたんに貿易問題にとどまらず、広く国際情勢一般に関して、平等の立場で、頻繁に意見交換を行うようになった。たとえば、第二回「池田・デューフエンベーカー共同声明」(一九六一年十月三十一日)は、ドイツおよびベルリンを含む国際情勢、中国、東南アジア諸国および極東における一般情勢、国際経済の推移、とくに欧州経済共同体および経済協力開発機構を含む地域のグループ化の問題などに関して、両首相が討議したと発表している。また、すでにこのころから日加両国は、ともに核兵器問題に対して深甚な関心を寄せるようになった。

このように緊密な交流を通じて、日加間には友好的気運がもりあがる折から、一九六七年七月にはカナダ建国百年祭およびモントリオール万国博が開催され、そ

れに高松宮・同妃殿下が天皇の名代として出席し、日加友好関係に一層華を添えることとなった。同年には万国博見物かねて、多数の要人を含む約一万九千名の日本人がカナダを訪れ、日本のカナダ認識を高めることに寄与した。

### (3) 日加貿易の進展

戦後の日加関係を一貫して支えてきた強力な柱は、両国の相互貿易促進への期待であった。これに対するカナダ側の態度は占領期から明らかにされており、日本側でも、一九五四年、吉田首相がカナダを訪問する理由として、「カナダは無限の資源を擁しているというだけでなく、わが国にとつてはもつとも信頼できる友邦の一つであり、将来わが貿易の相手国として大いに重視せねばならないからだ」と言明している。実際、日加通商協定が締結された一九五四年当時の日加貿易はカナダ政府の公表によると、輸出入あわせて一億千五百万ドル程度にすぎなかったが、その後十年を経て、一九六四年度には四億ドル以上に増大している。

一九五八年には、日加経済提携の最初の試みである銅鉱石の長期買付けを見返りとする設備資金の貸付契約(融資買鉱方式)が成立し、一九六四年には、いわゆる「稲山ミッション」がカナダを訪れて、日加経済関係のいつそうの発展と貿易の拡大を計った。一九五八年以降、トルドー政権に至る一九六八年までの日加貿易の推移は上の表のとおりである。

なおこの間、日本の経済発展に伴い、対加輸出品目にもおのずから変化がみられる。六四年当時の日本からカナダへのおもな輸出品は、繊維品、雑貨類、金属

品で、機械類は全体の二十パーセント以下であったが、その後日本の対加輸出は自動車、テレビ、ラジオ、通信機器等の機械部門が増大し、七一年には全体の約二分の一を占めるようになった。

### (4) トルドー政権下の日加関係

トルドー政権に入つて、日加関係は一つの「新段階」にさしかかった。貿易面では、一九六四〜七四年の十年間に、カナダの対日輸出は六・七倍、対日輸入は八・二倍に成長した。日本の輸出品目でも、一九七四年には機械類が全体の六十

五パーセント、鋼材が約二十パーセントを占め、五、六十年代にみられた消費材中心の対加輸出とは大きくその様相を異にするようになってきた。一方、交流の面でも、トルドー首相自身二度も来日するなど、日加要人の交流はほとんど枚挙にいとまがないほどになった。

しかし、重要なことは、そうした量的拡大よりも質的变化である。すなわち、カナダは一九七二年のいわゆる「第三の選択」によつて、日本をEJCと並んで最重要視するに至つたことである。この方

## 私とカナダ

# 生きている 新渡戸博士

岩手放送最高顧問  
(バンクナーバー在)  
福田 常雄

奇縁というものがある。

日加国交五十周年記念号の原稿依頼のあったのは、丁度上高原桂子夫人に亡父の残された日記を読んであげる約束をした日であった。

上高原家は鹿兒島出身で、下高原、新小田と共に日采カナダの名門といわれ、百年にわたつて多くの逸材を送り、現に夫人の二人の子息も有能なドクターである。

しかし夫人の父は田入参之助といい、福岡出身である。

日記は簡単なメモではなかった。明治二十七年(一八九四)五月十五日、タコマ

号で横浜を出る時からの「玄海漁人加奈陀見聞録」で、小さな字できつしり三冊の滞在日記だつた。

出航以来二十五日目にバンクーバーに着いているが、「大日本帝国の代表者たる領事館が二階の借家住いとは情なく」と明治青年は嘆いていた。

先人の労苦は当地に来て見聞するが、長い両国の歴史で、友情で結ばれたのは僅か二十年しかない。今後の我々の任務は如何にしてこれを持続させるかの探究でなければならぬ。

私は郷里の先輩、新渡戸稲造博士のお話を昭和五年(一九二〇)、盛岡中学一年生の時聞いて感動した。博士は「太平洋は小流れである。これをはさんだ米加と疎遠になつてはならない」と力説した。

博士の伝記を読むと、この頃国際緊張の進むのを恐れ悩んでいたのである。子供心にも壇上の温容と熱弁を覚えている。

博士が日本の立場を少しでも理解して貰うため、当地に見えたのは七十二才のときであった。しかしこの老軀を世は冷